

今回の訪日公演には、マーラーの交響曲第 5 番とブラームスのヴァイオリン協奏曲の組合わせの日もあり、これも魅力的だったが、本レポートは実際に聴きに行った 10 月 22 日の演奏会について。曲目はヴァーグナー『ニュルンベルクのマイスタージンガー第一幕への前奏曲』、ベートーベン『ピアノ協奏曲第 5 番』、ムソルグスキー作曲、ラベル編曲『展覧会の絵』。

会場はサントリーホール。ステージを客席が 360 度取り囲むヴィンヤード型客席で初めてオーケストラの後ろの席に座った。音響設計家でサントリーホールのホール音響設計担当だった豊田泰久さんが最近日経新聞に書いていたが、段々畑状の客席に小さな壁を作って反響音を集めているとのこと。ステージ周囲が音響反射板になっている東京文化会館に慣れていた国内オケによるサントリーホール完成時の評判は良くなかったとのこと。シューボックス型という横幅が狭く、側壁から反射音を得るタイプはヴィーン楽友協会大ホール。

僕は上記 3 つのホールで聴いた経験があるが、ホール全体の音響の差を説明する事は出来ない。今回、ステージ後ろに座って感じたことは、打楽器が近くで聞こえたこと、指揮者とピアニストの動きが、よく見えたこと。



演奏前にステージを後ろから撮った

『着席すると大きなドラと鐘がステージ最後部に置いてあった。『展覧会の絵』終曲『キーウの大門』のいためだな、ということはすぐに分ったが、「こんなに大きなものをドイツから持ってきて演奏ツアーに持ち運ぶのかしら？大変だな。」と思ってしまった。

ホールやステージの話が長くなった。演奏の話に移ろう。

アラン・アルティノグルの指揮は、てきばきと歯切れ良く、明るい感じがした。アルメニア系フランス人とのこと。アルメニア系フランス人と言えば、ポップス歌手にシャルル・アズナブールとシルヴィー・ヴァルタンがいたな、と思いを馳せた。

フランクフルト放送交響楽団の音も、指揮者のためか分らないが、全体に明るい感じがした。楽団員が比較的若く、楽しそうに演奏していた。曲目にもよるのだろうが。

ヴァーグナー『ニュルンベルクのマイスタージンガー第一幕への前奏曲』

僕が好きなヴァーグナーの曲目は、いくつかの序曲・前奏と、昔アマチュア合唱団で歌ったことのある合唱曲などに限られている。ヴィーン国立歌劇場で『ラインの黄金』を4時間立ち見席で聴いて疲労困憊した憶えがある。首記の曲は好きなものの一つ。明るく祝典的で、この指揮者・楽団に合っていると感じた。1959年、当時の皇太子ご成婚に関するNHKのテレビ放送が、まさに祝典的な、この曲をバックに流していたのを憶えている。

ベートーベン『ピアノ協奏曲第5番』

『皇帝』と名付けられた雄渾な曲であり、優雅なピアノ協奏曲第4番と対比されることもあるが、今回のブルース・リウ(ブルース・リーではありません)の演奏は、まず「音が美しい」と感じさせた。第4番の親戚という趣である。リウ自身、『『皇帝』は好機作品ですが、イメージ的には中期に近いように感じます。』と語っているので、なるほどと思った。



リウは中国系カナダ人。反田恭平が2位、小林愛美が4位になった2021年ショパン・コンクールで第1位。その時の演奏もBBCミュージック・マガジン誌で「息をのむような美しさ」と評されている。打鍵は強靱ではないが、迫力に欠けるのではなく、やわらかく伸びやかな演奏である。往年のバックハウスやギレリスのような豪快な音に馴れてきた耳には、この演奏は新鮮であった。彼の指が長いのに驚いた。リストやラフマニノフも指が長かったそうだが、これはピアノ弾きには有利だろう。もっとも、指の短いピアニストにもスペインのラローチャやポルトガルのピリシュのような女流名手もいるが。

アンコールはリウと、ピアニストでもある指揮者アルティノグルとのピアノ連弾で、何と楽譜は紙でなくタブレット。曲名は聴衆(僕の座席とは逆方向)に向かって言っていたのが聞き取れなかった。

ムソルグスキー作曲、ラベル編曲『展覧会の絵』

ムソルグスキーのピアノ原曲よりも、ラベル編曲の管弦楽曲を先に知った人のほうが多いだろうが、僕もその1人。ラベル版はロシア的泥臭さがなく、ラテン的に洗練されているが、今回は指揮者がフランス人ということもあってか、一段と洒落た演奏という印象を受けた。僕の席がステージの後ろにあるからか、特に金管の音が鮮明に聴き取れた。

アンコールの曲名を今度は聴き取れた。ドビュッシーの『月の光』。

今回のコンサートでは、明朗さと美しさを堪能したと言える。

以上